平城京遷都と外京の設置について*

林南壽**

〈차 례〉

1. はじめに
2. 平城京遷都と外京
3. 藤原京四大寺の移転
4. 藤原京私寺の移転
5. 外京の設置と興福寺および元興寺
6. むすび

【국문초록】

헤이죠쿄의 사쿄 동쪽에는 게쿄라고 불리는 방형의 돌출부가 있다. 본 논문은 헤이죠쿄 게쿄의 설정목적에 대하여 검토한 것으로, 후지와라쿄에서 헤이죠쿄로 이전한 여러 사원들의 성격을 고찰하여 다음과 같은 결론에 이르렀다.

첫째, 헤이죠쿄 천도에 즈음하여, 천황이 발원한 사찰인 다이칸다이지와 야쿠시지는 후지와라쿄의 절터에 상응하는 장소로 이전되었다.

둘째, 후지와라 씨의 씨사인 고후쿠지는 천도를 추진한 실력자

* This work was supported by the 2012 Yeungnam University Research Grant
** 嶺南大学校 美術学部 教授

후지와라노후히토에 의하여 710년 무렵에 京外이나 勝景인 현재의 절터를 획득한 것으로 추정하였다.

셋째, 후지와라노후히토는 경외 지역을 京内化하기 위하여 아스카데라(간고지)를 현재의 절터로 선정한 것으로 생각되었다. 그러나 아스카데라는 씨사인 고후쿠지보다 낮은 지역에 위치하게 되어 불만이 있어서 이전에 반감을 지니고 있었을 것으로 논증하였다.

이처럼 게쿄는 고후쿠지의 경내화를 위하여 아스카데라를 이전시키면서 설정된 것으로 판단된다.

주제어: 헤이죠쿄(平城京), 게쿄(外京), 후지와라쿄(藤原京), 고후쿠지(興福寺), 아스카데라/간고지(飛鳥寺/元興寺)

1. はじめに

平城京は律令体制にもとづく古代日本の都城を代表するものとして知られ、明治時代から考古学や美術史学、仏教史学など多様な分野から多彩な研究がおこなわれてきた。しかし、その広大な京域に比して発掘個所は少なく、文献史料もごく限られているために、平城京の実体については不明な点が多い。

小論では、平城京の外京について検討することにしたい。外京とは平城京の左京の東辺に張り出した区劃のことで、関野貞によって命名された[1]。この外京は平城京以前の藤原京にも、また平城京以後の平安京にもみられない、平城京特有の区劃であるが、こうした変形にもみえる区劃がなぜ設定されたかについては未だ定説をみていないようである。

関野や岸俊京に元興寺や興福寺などの寺院が位置していたことを

1) 関野貞,『平城宮及大内裏考』, 東京帝国大学工科大学, 1907, pp. 56-59.

指摘したが[2]、この指摘は外京を理解するうえで重要なポイントであると思われる。そこで、小論では平城京の構造と外京に位置する寺院の性格を検討しながら、外京の設定理由とその意義について考察することにしたい。

2. 平城京遷都と外京

慶雲四年(七〇七)二月十九日、文武天皇は五位以上の王臣に遷都について論議させた。都の造営は莫大な労働力や資金を投入せねばならない国家的大プロジェクトであり、しかも祖父母の天武・持統天皇によって造営された藤原京が新京として機能してからまだ十四年しか経っていなかった時点での遷都の論議である。大橋一章によると、古代における寺院堂宇の建築には約四ー五年かかるというが[3]、そうした寺院建築よりも大きな規模をもつ宮殿区域の木造建築群ともなれば、慶雲四年ごろまですべて完成していなかった可能性がある。さらに、藤原京内に創建された薬師寺が天武の発願から持統朝を経て、文武朝にようやく伽藍の造営がほぼ終わり、大官大寺の金堂や塔が同じく文武朝に建てられていることを踏まえれば、藤原京内の各地で様々な建築工事がおこなわれていたのであろう。それにもかかわらず、文武が百官に遷都を論議させたのはよほどの事情があったと考えざるを得ない。

遷都の理由について、大橋一章は藤原京の地形の悪さによる衛生問題をあげている[4]。すなわち、図1にみるように、藤原京は南が高

2) 岸俊男,『日本の古代宮都』, 岩波書店, 1993, pp. 71-72.
3) 大橋一章,「飛鳥寺の創立に関する問題」,『仏教芸術』106, 毎日新聞社, 1976, pp. 3-22.
4) 大橋一章,『興福寺-美術史研究のあゆみ-』, 里文出版, 2013, p. 16.

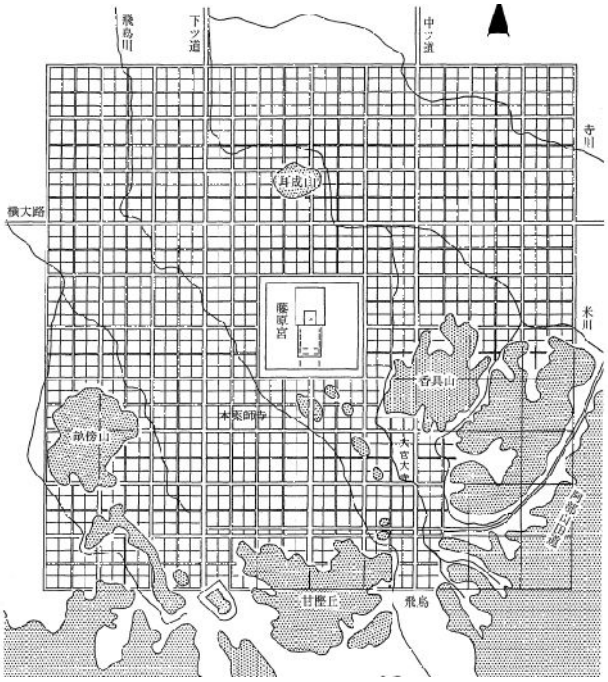


図 1 藤原京条坊復元図
(林部均,「藤原京の条坊制」より)

く北が低い地勢で、主要河川である飛鳥川は京の東南から西北へ流れるために、汚物などが宮殿のほうに流れてくる問題を抱えていたことを指摘したのである。この指摘はおそらく『続日本紀』慶雲三年三月十四日条の「京城内外多有穢臭」という記事によって導かれたのであろうが、遷都の論議開始から三ヶ月後に文武が二十五才の若さで夭折してしまったことから推測すれば、柔弱な文武にとって、また藤原境内の人々にとって、この穢臭はまさに死活にかかわる大問題であったかも知れない。

こうした状況を承けてか遷都の議は文武を嗣いだ元明朝にも続けられ、さっそく和銅元年(七〇八)二月には平城京への遷都の詔が出

され、二年後の和銅三年三月には平城京へ遷った。慶雲四年の遷都の議が始まってからわずか三年で新京への移転に至っており、遷都事業は文武天皇の喪にもあまり影響されることなく、ものすごいスピードで進められたといえる。

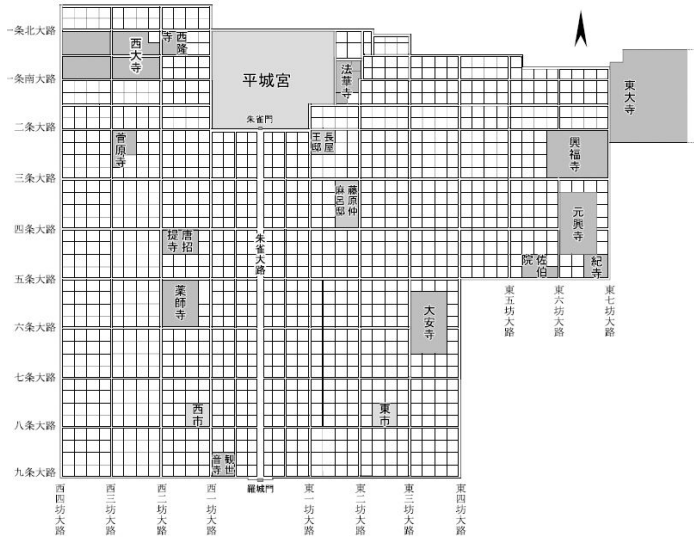


図2　平城京復元図
（奈良市埋蔵文化財調査センター,『平城京を掘る』より）

こうして開かれた平城京は、東西四・二キロ、南北四・八キロにわたる長方形のプランで設計されていた。京の北部中央には宮城が造営され、その正門である朱雀門前を南北に伸びる朱雀大路を中心に左京と右京が左右対照にデザインされた。また左京と右京はそれぞれ南北九条、東西四坊に区劃されていて、左右京の六条あたりには大安寺と薬師寺が、八条には東市と西市がおかれた(図2)。こうした平城京のプランが唐の長安城をモデルにしたことはいうまでもないことであるが、平城京には長安城とは異なる特徴がいくつかみら

れるのである。そのうち小論でとり上げるのが外京である。

一九〇七年、関野貞は正倉院文書や『東大寺要録』などの文献史料を検討し、左京の二条から五条にかけて五坊と六坊、七坊が存在することを明らかにした[5]。先に述べたように左京と右京は左右対称でデザインされていたから左京の東限は四坊で終わるはずであるが、それが七坊まで張り出したために変則的な条坊制を呈している。関野はこの張り出し部分を仮に外京と称したいといったが、この仮の名称は広く使われるようになった。

さて、平城京は外京があることで変則的な形となっており、こうした変則的はそれを甘受してもやらねばならない理由があってこそ生ずるのであろう。これについて、関野は、平城京経営の際に興福寺や元興寺のごとき大伽藍がこの地域に建立されたことで条坊制が拡張されて京内に数えられるようになったと述べているが、論文の主旨が平城京や大内裏の条坊復元などにあるためか、それ以上は追究していない。

関野説は外京の存在を明らかにし、また外京と興福寺および元興寺との関係について触れるなど外京の核心的問題を指摘していて、大いに注目すべきである。そうすると、次の問題は、なぜ興福寺や元興寺のような大寺院が左京や右京の中ではなく、わざわざ外京をつくってまでして移したかについての考察であろう。

岸俊男は、外京がなぜ設定されたのか、またその設定時期はいつかという問題については、そこに藤原京外にあった飛鳥寺や興福寺が移建されて、元興寺・興福寺として位置することになったという事実を除外して考えることはできないと述べている[6]。岸は、藤原京外に位置した元興寺や興福寺が、平城京遷都に際して外京に

---

5) 関野貞, 前掲註1, pp. 56-59.
6) 岸俊男, 前掲註2, pp. 71-72.

移ってきたことに着目したのである。

岸は藤原京の境域を飛鳥の三山に囲まれた地域と想定していたから、元興寺の前身である飛鳥寺は藤原京外の飛鳥真神原に位置し、一方の興福寺の前身の厩坂寺はその場所が不明であるものの藤原京内ではないと考えていたようである。すると、両寺院はともに藤原京外に位置し、また平城京移転後も京内とはいえ外京区域に位置したことになるから、厳密に言えば、この二つの寺院は藤原京や平城京において京外に置かれた存在であるという共通点をもっている。最近の発掘調査によって藤原京の京域は岸が想定したものよりも広範囲にわたり、飛鳥寺も藤原京内に入るから、この点において岸説は修正を要するが、岸が外京の問題を考えるうえで重要な糸口を提供したことは評価してよい。

これに対し、王維坤は長安城の東北につくられた大明宮を外京のモデルと考えている[7]。隋の大興城を引き継いだ長安城はもともと南北に長い長方形であったが、貞観八年(六三四)太宗は高祖の清暑のため長安城東北に張り出す形で大明宮をつくった。王は平城京の北部には市庭古墳があり、そこに外京をつくることができなかったので、左京の東方に張り出す形で外京をつくったと考えたのである。

平城京が長安城をモデルにしたことは今さらいうまでもないことであり、外京と大明宮が張り出す形でつくられていることは共通する。しかし、大明宮は長安城造営後に付加されたもので、またその名のとおり宮城であるのに対し、外京は遷都時に設計された条坊の一部を指すから、両者を同じ見方から理解することは筋違いといわねばならない。いいかえれば、外京には元興寺や興福寺など寺院建

---

7) 王維坤,「唐長安城と平城京の比較研究」,『人文』2, 学習院大学人文科学研究所, 2004, pp. 8-20.

築が建っていて、含元殿をはじめ朝廷や内裏の諸建築が建ち並ぶ大明宮とはその性格がまったく異なるのである。したがって、私は外京が大明宮を参考にしてつくられたと考えることには賛成できない。

以上のように、関野は外京における元興寺と興福寺の存在に気づき、岸は両寺院がともに京外に位置していたことに注目し、外京研究の糸口を提供した。とはいえ、平城遷都に伴って移転した寺院は元興寺や興福寺だけでなく、そのほかにも存在するから、検討の対象を広げて考察する必要があると思われる。そこで、次章では藤原京から平城京へ移転した幾つかの寺院をとり上げ、その性格を検討したい。

3. 藤原京四大寺の移転

周知のように、藤原京には四大寺と称される寺院があった[8]。すなわち、大官大寺、薬師寺、川原寺、飛鳥寺の四寺である。これらの寺院は大寺といわれるが、大橋一章によると、大寺は天皇勅願の寺院のことで、律令体制の続くかぎり国家の保護が保証される、もっとも格の高い寺院であるという[9]。この四つの寺院のうち、大官大寺や薬師寺、飛鳥寺は平城京へ移転し、川原寺は移転しなかった。ここでは各寺院の創立と移転の状況について検討することにしたい。

まず、大官大寺は、舒明天皇の勅願によって創建された百済大寺に起源する。つまり、『日本書紀』や『続日本紀』、『大安寺伽藍縁起并

8) 『続日本紀』巻二, 大宝二年十二月二十五日条
9) 大橋一章, 「大寺考」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第41輯 第3分冊, 早稲田大学大学院文学研究科, 1995, pp. 105-121.

流記資財帳』(以下『大安寺資財帳』)によると、舒明天皇十一年(六三九)七月、天皇は詔して百済川のほとりに大宮と大寺を造作することを命じ、西の民には大宮を、東の民には大寺を造らせたという。これが日本初の勅願寺の誕生であり、その場所は奈良県桜井市の吉備池廃寺と推定されている。また同年十二月に九重塔を建てたとある。発願の詔から半年後にあたり、この記事は造営の完成ではなく工事の開始と理解すべきであろう。

ここで注意を引くのは、直木孝次郎が指摘したように大宮と大寺がワン・セットになっていることである[10]。これは天皇家と仏教の結びつきを示唆するもので、その後の国家仏教としての古代日本仏教の性格を規定することになる。

舒明の后として天皇位を嗣いだ皇極天皇の即位元年(六四二)七月、百済大寺の南庭で請雨のために仏菩薩四天王の像を飾って大雲経を読む法会がおこなわれた。法会が仏殿ではなく、南庭でおこなわれていることをみると、この時にはまだ寺観が整っていなかったと考えられる。

孝徳朝の白雉元年(六五〇)十月には、丈六像や脇侍菩薩、八部衆像などをあらわした繍仏をつくり、翌年三月には完成し、皇極が十師を請うて斎を設けたとある。天寿国繍帳や薬師寺の阿弥陀繍仏からもわかるように、繍仏は未亡人が亡き夫のためにつくるのが通例であり、百済大寺の繍仏も皇極が亡き夫舒明のために発願したに違いない。その大繍仏を架けて設斎したのであるから、このころの百済大寺は伽藍完成とはいえないまでも、仏像を飾る程度の堂宇は建っていたと考えてもよかろう。

このように百済大寺は舒明と皇極の夫妻によってその基礎が固め

---

10) 直木孝次郎, 「百済大寺の建立と阿倍氏」, 『相愛大学研究論集』15-1, 相愛大学, 1998, pp. 1-11.

られたのであるから、その子である天智と天武の時代においても百済大寺の位相は極めて高いものであったと推察できる。天智朝には霊験仏として知られる本尊の釈迦如来像が勅願でつくられ[11]、つづく天武二年(六七三)十二月には高市に移転して高市大寺と称され、天武六年には大官大寺と改称された。その場所は不明だが、高市は現在の明日香村に該当するから、天武の宮処のある高市に移したのであろう。舒明は宮と寺とをワン・セットで造立したが、天武もその伝統にしたがったともいえよう。その後藤原京の造営にともない、大宝二年(七〇二)藤原宮に移転した。

こうしてみると、大官大寺は第一号の勅願寺であり、天皇家さらには国を象徴する寺院としてその存在意義が評価され、天皇家とは不可離の関係にあるという認識が成立していたのではないだろうか。そうした認識があったからこそ平城京遷都がおこなわれると、藤原京の寺地と同じく平城京の東南部に移転したのであろう。『続日本紀』霊亀二年(七一六)五月十六日条には元興寺を左京六条四坊に移し建てたとあるが、この地域は大安寺の寺地であることから、ここにいう元興寺は大安寺の誤記であると考えられている[12]。

ところで、この寺と宮との位置関係をみると、舒明は当初百済大寺を発願する際に、東の民に寺をつくらせたから、百済大寺は宮の東に位置したはずである。また藤原京の大官大寺と平城京の大安寺はともにそれぞれ宮の東南に位置していて、まったく一致するとまでは言えないものの、おおむね宮の東に位置することに共通するから、現在場所のわからない高市大寺の寺地も飛鳥の東にあったと推定するのも可能ではないだろうか。

---

11) 中野聡,「霊験仏としての大安寺釈迦如来像」,『仏教芸術』249, 毎日新聞社, 2000, pp. 83-102.

12) 福山敏男,「大安寺及び元興寺の平城京への移転の年代」,『史蹟名勝天然記念物』11-3, 史蹟名勝天然紀念物保存協会, 1936, pp. 13-22.

つぎに、四大寺の一つ薬師寺は、『日本書紀』や『続日本紀』、『薬師寺縁起』(一〇一五年成立)によると、天武九年(六八〇)十月に病にかかった皇后のために発願した寺院である。発願後すぐ皇后は安平を得たというから、私は薬師寺の仏像が大安寺の釈迦如来像に優るとも劣らない霊験仏として認識されたと考えている[13]。文武二年(六九八)十月には薬師寺の構作がほぼ終り、衆僧を住まわせており、発願から完成まで約二十年の時間を所要している。

薬師寺は藤原宮の西南の地に創建され、平城京の右京六条二坊に移転した。とはいっても、藤原京の薬師寺の伽藍は移転後もそのまま残って寺院として機能しており、平城京へは寺籍のみの移転となった。藤原京に残った薬師寺は本薬師寺とも称され、一方の平城京薬師寺は西ノ京薬師寺と呼ばれている。移転時期について『薬師寺縁起』は養老二年(七一八)と伝えるが、発掘調査によると、東僧房北方の井戸より霊亀二年(七一六)の年紀のある木簡が本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土器などとともに出土しており、薬師寺の造営は霊亀二年ごろにはおこなわれていたと考えられている[14]。

このように薬師寺の移転状況はとてもユニークで、これについて諸研究者によって様々な論著が発表されてきたが、私は天武天皇の発願後すぐ皇后の病が治ったという薬師像の霊験性、また赤漆文欟木御厨子の相続などにみえる執拗的ともいえる天武系歴代天皇の血縁意識によると考えている[15]。いずれにせよ、薬師寺の移転は大官大寺と同じく藤原京から平城京に移転していて、しかもその場所は藤原京の位置に相応するところとなっていることは注目しておきたい。

---

13) 林南壽,「고대 일본 약사여래상의 도상」,『미술사학연구』279/280, 한국미술사학회, 2013, pp. 371-396.

14) 大橋一章,「平城京における薬師寺の造営」,『美術史研究』23, 早稲田大学美術史学会, 1986, pp. 98-114.

15) 林南壽, 前掲註13, 2013, pp. 371-396.

つぎに、四大寺の一つである川原寺は文献史料に恵まれず、その創建については不明点が多い。『日本書紀』によると、白雉四年(六五三)六月に亡くなった僧旻法師を弔うために、画工に命じて多くの仏菩薩像をつくらせて川原寺に安置したというが、註記には或本には山田寺にあると記されている。『日本書紀』が編纂された養老四年(七二〇)の時点では川原寺は官寺として機能しており、資財帳などの公文も作成していたはずであるから、『日本書紀』の編者らは川原寺の創建や沿革は十分調べ得る環境にあったと考えられよう。しかしながら、『日本書紀』の編者はその努力をしなかったのであって、それは川原寺が平城京の実力者たちの関心から外されていたことを暗示するのであろう。

『日本書紀』天武二年(六七三)三月条によると、書生を集めて川原寺で一切経の書写を始めたという。一切経の書写という大事業を始めたわけであるから、このごろまでに川原寺はある程度の寺観を整えていたと考えられる。従来は、川原寺の寺号が斉明天皇の川原宮から由来したらしいこと、また天武二年までには存在していたことを合わせて考慮し、川原寺は天智天皇が母親である斉明のために川原宮を寺にしたのではないかといわれてきた16)。私もこの説に同意する。

平城京遷都に際し、川原寺は移転せずに飛鳥に残った。そのためか『続日本紀』天平勝宝元年(七四九)五月条や七月条によると、諸寺に対しておこなわれた施物墾田施入と諸寺墾田地限において、川原寺は大寺であるにもかかわらず私寺の法隆寺や四天王寺と同等に扱いされており、寺格が相当低下していることがわかる。

では、なぜ川原寺は平城京へ移転しなかったのであろうか。これについて、大脇は川原寺が天智天皇の創建に関わることをあげてい

16) 大脇潔,『飛鳥の寺』, 保育社, 1989, pp. 102-137.

る[17]。つまり、天智崩後、天武は天皇位をめぐって天智の子の大友皇子と対決した壬申の乱に勝ち、これによって天智系勢力は没落した。川原寺は天智創建の寺院であるから、天武系の歴代天皇や側近らに疎んじられ、平城京への移転から外されたというのである。先に述べたように、川原寺は天武系の天皇が治めていた天平時代には冷や飯を食わされていたが、天武系が跡絶えて天智系の光仁天皇が即位すると、天智の第七皇子として光仁の父親に当たる志基皇子の忌斎が川原寺で開催されたのは、川原寺の性格を理解するうえでよい事例といえよう。

最後の四大寺は飛鳥寺である。飛鳥寺は蘇我馬子が用明天皇二年(五八七)に発願した日本初の本格的な寺院で、法興寺とも呼ばれた。先に述べた大官大寺や薬師寺、川原寺が天皇の発願によって創建されているのに対して飛鳥寺は私寺であるが、この寺が政治や外交の場になることが屢々あった。その第一事件は、皇極三年に飛鳥寺西の槻木の下でおこなわれた打鞠における中臣鎌足と中大兄の密計である。これがきっかけとなって翌年乙巳の変で蘇我氏は壊滅してしまった。この時、後に天智となる中大兄は飛鳥寺に入って籠城に備えていた。蘇我氏発願の寺院が蘇我氏打倒の場となったのはアイロニーとしかいわざるを得ない。

飛鳥寺西の槻木においては、法会や覩貨邏人、蝦夷らのための饗応がおこなわれており、ここは公的広場として機能していた。飛鳥寺の発掘報告によると、飛鳥寺の西門は南門よりも大規模であったことが明らかになった[18]、飛鳥寺の西門前は当時の幹線道路である横大路や中ツ道から飛鳥に入る関門にあたる要衝地であり、飛鳥における特殊な性格の場所であったことは間違いない。

---

17) 大脇潔, 上掲註16, 1989, pp. 102-137.
18) 大脇潔, 前掲註16, 1989, p. 36.

そのためか、天武九年四月には詔が下され、飛鳥寺は官治の寺ではないものの官治を受けてきたこと、またかつての功を認められ、猶も官治の例に入れることが決まった。この詔によって飛鳥寺は名実ともに官寺となったのである。

『続日本紀』によると、養老二年(七一八)九月二三日に法興寺、つまり飛鳥寺は新京の四条七坊に移って元興寺となり、藤原京の飛鳥寺はそのまま存続して本元興寺と称された。四条七坊は藤原京の飛鳥寺の位置と同じく平城京の東南端にあたるから、大安寺、薬師寺、元興寺など藤原京の官寺は藤原京のもとの位置に相応する場所に移転したことになる。

ところで、飛鳥寺の移転は薬師寺と同じく寺籍のみで、平城遷都後にも藤原京には飛鳥寺が残って寺院として機能していた。この事実は飛鳥寺や薬師寺は飛鳥を離れようとはしなかったことを意味するのではないだろうか。大官大寺は文武朝に金堂や九重塔の完成を前に焼失したため、改めて伽藍を建てる必要があったが、薬師寺は造営がほぼ終わったばかりなのに新京への移転には少なからず抵抗があり、飛鳥寺も日本初という由緒深い伽藍をおいて新京へ移転することを快く思っていなかったかも知れない。

4. 藤原京私寺の移転

藤原京から平城京へ移転した私寺のなかで筆頭格は興福寺であろう。しかし、興福寺の草創を伝える文献史料はきわめて少なく、わずかに『興福寺流記』が残っているにすぎない。『興福寺流記』所載の「山科流記」の「宝字記」によると、中臣鎌足は大化改新の契機となった乙巳の変に際し、蘇我氏打倒を祈って釈迦像と四天王像の造立を誓願し、成功した後に誓願どおりに仏像を造立した。その後鎌足が

病に罹ると、夫人の鏡大王は夫の病気平癒を願って鎌足発願の釈迦三尊像を本尊として、天智八年(六六九)山背国山階に山階寺を創建し、天武元年(六七二)には高市郡の厩坂に移り、地名によって厩坂寺と称されたという。この厩坂寺はやがて平城遷都にともなって現在地に移転し、興福寺となるのである。

ところが、奈良時代以降の日本史における興福寺の華々しい歴史とは正反対に、『日本書紀』には興福寺についてまったく記されていない。藤原京造営から平城京遷都ごろに朝廷の実力者であった藤原不比等は『日本書紀』の編纂にも関わっていたはずであるが、その『日本書紀』に興福寺関連の記事がまったくないのは不審といわねばならない。しかのみならず、「山科流記」に引用された「宝字記」よりも古い時期の史料である「天平記」などにはこの縁起が記されておらず、さらに縁起の内容も漠然としており、藤原京以前の興福寺の姿は実態がつかめない。そのためか興福寺の前身である山科寺や厩坂寺の寺地も未だ確認されておらず、実体が存在したか否かが疑われている。

『興福寺流記』によると、厩坂寺は和銅三年(七一〇)の平城遷都に際し、平城京左京三条七坊の現在地に移転して興福寺となったという。大橋一章は、平城京遷都の推進者であった藤原不比等が和銅元年の詔によって遷都が決まってから、いち早く平城京の一等地である現在地を手に入れ、氏寺の造営に乗り出したと推測している[19]。おそらくその通りで、すると、和銅三年は実質的な興福寺の創建年代と考えられるから、中金堂をはじめとする堂宇の建築は平城遷都後まもなく開始されたのであろう。

平城京遷都ごろの興福寺は藤原氏の氏寺であったが、藤原不比等が死去した養老四年(七二〇)に元明太上天皇と元正天皇が造興福寺

19) 大橋一章, 前掲註4, 2013, pp. 13-35.

仏殿司を設けたことで、その性格は一変したと考えられる。なぜなら、興福寺の仏殿造営が天皇や国家機構によって進められる以上、興福寺は単なる私寺ではなくなることを意味するからである。造興福寺仏殿司の設置後、不比等の一周忌の八月三日に北円堂が建立された。一年での堂宇完成という、ほかに例をみない短期間の造営は、国家機構の手による造営だからこそ可能であったと解釈すべきであろう。

その後、神亀三年(七二六)聖武天皇は元正太上天皇の病気平癒のために東金堂を建立し、その四年後の天平二年(七三〇)には五重塔が建立された。天皇による発願であるから、北円堂と同じく造興福寺仏殿司のような国家機構がその造営を担当したのであろう。さらに天平五年には光明皇后が亡き母親の橘三千代のために西金堂を建立した。ここは皇后職の指示により、造興福寺仏殿司が引き続いてその造営にかかわったと考えてよい。

つまり、興福寺では次から次へと天皇や皇后の発願による堂宇や仏像がつくられており、興福寺は濫觴こそ藤原氏の氏寺ではあるものの、主な伽藍は天皇家によってつくられたわけであるから、官寺のような特別な扱いを受けることになったのであろう。

先に述べたように藤原京における厩坂寺の実体は不明であり、その存在すら疑われているから、その寺地の比定は困難である。となれば、平城京三条七坊の現在地との関係も不明といわざるを得ない。ただし大安寺や薬師寺、元興寺が藤原京の旧寺地に相応する場所に移転していることを考慮すれば、興福寺も現在地に相応させるべく、厩坂寺という寺号を創作した可能性も考えておく必要があろう。

さて、藤原京から平城京へ移転した私寺に紀寺があげられる。紀寺も文献史料に乏しくその創建事情は不明であるが、『続日本紀』には創建時期を示唆する記事がある。すなわち、同書天平宝字八年(七

六四)七月条によると、紀寺の奴・益人らの訴えにより紀寺の奴婢七十五人を良民としたが、その根拠とされたのは天智九年(六七〇)に作成された公文であった。公文には益人の祖先が寺工の食を担当していたとあるから、これによって天智九年ごろ紀寺は存在し、何らかの造営をおこなっていたことは明らかであるが、創建当初の寺地は不明である[20]。

平城京の紀寺は東南端である左京五条七坊に位置している。文献史料がないために移転時期も不明であるが、遷都の際に移転した可能性が高いのではなかろうか。

ところで、藤原京から平城京へ移転した寺院に禅院寺がある。『続日本紀』文武四年(七〇〇)三月十四日条の道昭卒伝には、道昭が唐留学から帰り、飛鳥寺の東南隅に禅院を建てて止住し、平城遷都に際して右京に移転したと書かれている。これに加えて禅院寺には道昭が唐から将来した多くの経論が所蔵されていたが、これらは楷好で錯誤がないと特記されている。

『日本三代実録』元慶元年(八七七)十二月十六日条には、禅院寺が天智二年(六六三)に創建され、和銅四年(七一一)八月に平城京へ移転したこと、禅院寺を元興寺の別院とすることが書かれ、一方、薬師寺に伝来する仏足石には禅院寺が右京四条一坊にあったと記されている。大寺でもなく、さりとて高位貴族の創建でもない禅院寺についてその沿革が正史に残っているのは興福寺とは異なる様相を示しており、それだけ道昭と彼の将来した経論が朝廷に高く評価されていたことをあらわしている。

この記事で注目すべきは禅院寺の移転場所とその時期である。すなわち、移転場所は大安寺や薬師寺、元興寺など官寺が藤原京のも

---

20) 現在飛鳥には紀寺跡と称される寺院址が残っていて、金堂と講堂が南北一直線に並び、塔は金堂の東南に位置する、いわゆる大官大寺式の伽藍配置と推定されているが、ここが紀寺である確証はない。

との場所に相応するところに移転したのに対し、この寺は右京へ移転し、その時期も元興寺の養老二年よりも七年早い和銅四年である。これに加えて藤原京から平城京遷都の際には官寺だけでなく、私寺がもとの場所柄にとらわれずに移転していたことも重要なポイントとして留意したい。

『日本書紀』天武九年(六八〇)五月一日条には、京内の二十四の寺院に綿布などを施入したとあり、藤原京内には二十四の寺院があったことがわかる。京内の範囲については諸説あるが、当時の官寺は大官大寺と薬師寺、川原寺、飛鳥寺の四ヶ寺であるから、そのほかの二十ヶ寺は私寺で、檀越によって寺地の規模も伽藍の様相も区々であったと考えられよう。そのうち、幾つぐらいの寺院が平城京へ移転したかは知るよしもないが、小規模の寺院は檀越の住居の近くに移転した可能性が高いのではないだろうか[21]。

5. 外京の設置と興福寺および元興寺

かつて関野は、外京に元興寺や興福寺という寺院の存在に気づき、岸は両寺院が藤原京においても京外にあったと指摘した。つまり、この二つの寺院と外京との関係が注目されてきたのである。最近山中章も関野と岸の説を承けて、外京の設定目的は氏寺を集中させることにあったと推定した[22]。三・四章で検討したように、天皇発願の寺院は左右京内に移転し、元興寺や興福寺、紀寺など氏寺か

---

21) 檀越の住居の近くに寺院を建立する例として山城国の広隆寺をあげることができる。林南壽,「広隆寺의 초기밀교와 元興寺」,『인문연구』57, 영남대학교 인문과학연구소, 2009, pp. 549-574.

22) 山中章,「律令国家形成過程の古代王権」,『日本古代王権の成立』, 青木書店, 2002, pp. 41-94.

氏寺に起源をもつ寺院は外京に移転しているから、私も先行研究にはおおむね賛同するが、いまなお検討の余地があるように思われる。

すなわち、元興寺は日本初の本格的寺院という由緒をもち、また天武九年の詔によって官寺として認定された、格の高い寺院である。それに対し、興福寺は藤原氏の私寺であり、『日本書紀』や『続日本紀』には興福寺を官寺とするという記事は見当たらないから、厳密にいえば官寺ではなかった。興福寺が官寺扱いを受けるようになったのは、養老四年(七二〇)から歴代天皇や光明皇后によって堂宇や仏像が造立されたことによると考えられるから、和銅三年の移転当初において興福寺は元興寺とは格違いの寺院であったといわねばならない。また紀寺も官寺ではなく、あくまで紀氏の氏寺であり、元興寺と同等に考えることはできまい。さらに禅院寺も私寺であるが、この寺は右京四条一坊に移転しているから、氏寺に起源をもつ寺院を集めるために外京を設定したと考えることはやや早計であるのではないだろうか。

興福寺が移転した外京三条は春日山地の裾にあたり、平城京一体が眺望できる一等地である。先に紹介したように、大橋一章は興福寺がこの勝地に移転できたのは、平城京遷都を推進した実力者の不比等がいち早く獲得したからだと指摘されている[23]。おそらくそのとおりであろうが、それ以上は追究していないため、『続日本紀』のもとに不比等がこの地を獲得するまでの過程を検討してみたい。

和銅元年(七〇八)二月十五日に下された遷都の詔に、「方今平城之地、四禽叶図、三山作鎮、亀筮並従、宜建都邑」とあり、平城京の地勢について述べている。つまり、遷都推進者らはその以前すでに現地視察を終えて結果を報告し、それをもとに遷都の詔が作

23) 大橋一章, 前掲註4, 2013, pp. 13-35.

成されたのであろう。すると、この時点で遷都を積極的に推進した実力者の藤原不比等は外京地域の勝地たるを知っていたと考えてよかろう。

その七ヶ月後の九月二十日には元明は平城に巡幸してその地形を観ており、二十二日には山背国相楽郡岡田離宮に行幸、二十七日には添上郡の春日離宮に行幸し、二十八日に藤原宮に還り、三十日には阿倍朝臣宿奈麻呂と多治比真人池守を造平城京司長官に任命した。この約十日間の行幸における訪問先、帰還後の造平城京司任命をみると、新京の地勢や、相楽郡の木材と木津川の水運などを視察し、遷都工事の段取りを着実に進めていたと考えられる。この時点で平城京遷都のための実質的準備が整えられるようになったといえよう。

同年十二月五日には平城京の地において鎮祭をおこなっており、いよいよ遷都の工事が始まったと判断できる。つまり、和銅元年十二月の時点で平城京の青写真はできあがり、外京についての構想も決まっていたと考えられる。遷都の責任者である不比等は大官大寺や薬師寺の移転場所を藤原京の寺地に相応する位置に決め、飛鳥寺や興福寺の外京への移転を考えたのであろう。

では、外京の構想は如何にして案じられたのだろうか。文献史料がなく、想像の域を出ないが、私は次のように考えている。つまり、平城京は長安城に倣って朱雀大路を挟んで左右対称に設計され、大官大寺と薬師寺がほぼ左右対称、東西市は左右対称に配置されることになった。大橋のいうように、興福寺は不比等によって和銅元年ごろにすでに現在地が候補となっていたのであろう。しかし、この地は平城京が眺望できる勝景ではあるものの左京外にあたるから、このままでは自らの氏寺は京内寺院ではなくなるという問題があろう。そのため不比等はこの地を京内化するために飛鳥寺の移転先を考えたのではないだろうか。

飛鳥寺は官寺であり、日本初の本格的寺院という誇り高き寺院であるから、その格にふさわしい移転場所、すなわち京内への移転が必要となろう。ところが、左右整然とならぶ左右京内において飛鳥寺と対になりうる寺院がなかった。というのも天智天皇創建の川原寺が移転から外されたのである。そのうえ左右京の六条には天皇勅願の大官大寺と薬師寺の移転が決まり、もし飛鳥寺が京内に移転するならば、その寺格や飛鳥の寺地柄からして七条より南方へ移転ということになろうが、これにも問題があった。というのも、すでに山田安彦が指摘したように平城京の五条以北には貴族が居住し、六条より以南は一般庶民の居住地としての色彩が強く[24]、七条には東西市があったから、官寺の飛鳥寺を宮城から遠く、また一般庶民の居住予定地に移転させることは考えにくい。

そこで、飛鳥寺が藤原京の東南に位置していたことを鑑み、興福寺の候補地として確保した土地の南まで左京の東方を張り出すように設計し、四条と五条を伸ばして飛鳥寺を移転させることが案じられたと考えることができよう。

興福寺は平城京が眺望できる一等地に何ら不満はあるまい。しかし飛鳥寺側からみれば、外京の五条六坊は、単なる氏寺の興福寺の建設予定地より一段低い位置にあり、そのうえ宮城からもっとも遠く離れることになるから、朝廷、より正確に言えば不比等への不満の声が上がるのは当然であろう。

『類聚三代格』巻二貞観四年八月二五日の太政官符には、和銅三年の遷都の際に諸寺は移ったが、飛鳥寺は移転しなかったために朝廷が新たに寺をつくって移転しないことに備えたが、これが元興寺であると記されている[25]。この記事は不比等に対する飛鳥寺の不満を

---

24) 山田安彦,「平城京の内部構造に関する若干の問題」,『岩手大学学芸学部研究年報』19-1, 岩手大学学芸学部, 1961, pp. 15-34.

25)『類聚三代格』巻二, 謹検案内、此寺仏法元興之場、聖教最初之地也、去和

示唆するものとして考えたい。

6. むすび

平城京の外京の設定目的について、そのごろに移転した各寺院の性格を検討した結果、つぎのような推論にいたった。

平城京遷都にあたり、天皇勅願の寺院である大官大寺や薬師寺は藤原京の寺地に相応する場所に移転が決まり、藤原氏の氏寺である興福寺も遷都を推進した実力者の藤原不比等によって和銅元年ごろに現在の寺地を獲得していたと推定できた。しかし、この場所は京外になるため不比等はここを京内化するために官寺の飛鳥寺の移転を考えたと思われる。

一方の飛鳥寺は川原寺が移転しなかったため左右対称の配置にならないこと、七条以南が移転先としてふさわしくないことから、不比等によって現在地が当てられ、興福寺の寺地とあわせて外京への移転となり、氏寺である興福寺よりも一段劣る寺地を当てられて不満をもっていたことを論証した。

私は、平城京は外京があることで変則的な形となっており、こうした変則はそれを甘受してもやらねばならない理由があってこそ生ずると述べた。その理由は、藤原不比等が氏寺を新京の一等地に建てようと劃策したことや、また官寺の飛鳥寺を京内に移すために左京を張り出す形で伸ばしたことに求められるのである。関連史料がなく憶測に近い結論となったが、諸賢のご叱正を賜りたい。

銅三年帝都遷平城之日、諸寺随移、件寺独留、朝庭更造新寺、備其不移之闕、所謂元興寺是也

参考文献

1. 기본 자료

『日本書紀』, 『続日本紀』, 『大日本古文書』, 『東大寺要録』, 『興福寺流記』

2. 논문

林南壽, 「고대 일본 약사여래상의 도상」, 『미술사학연구』279/280, 한국미술사학회, 2013, pp. 371-396.
_____, 「廣隆寺의 초기밀교와 元興寺」, 『인문연구』57, 영남대학교 인문과학연구소, 2009, pp. 549-574.
大橋一章, 「平城京における薬師寺の造営」, 『美術史研究』23, 早稲田大学美術史学会, 1986, pp. 98-114.
_____, 「大寺考」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第41輯 第3分冊, 早稲田大学大学院文学研究科, 1995, pp. 105-121.
直木孝次郎, 「百済大寺の建立と阿倍氏」, 『相愛大学研究論集』15-1, 相愛大学, 1998, pp. 1-11.
中野聡, 「霊験仏としての大安寺釈迦如来像」, 『仏教芸術』249, 毎日新聞社, 2000, pp. 83-102.
福山敏男, 「大安寺及び元興寺の平城京への移転の年代」, 『史蹟名勝天然記念物』11-3, 史蹟名勝天然記念物保存協会, 1936, pp. 13-22.
山田安彦, 「平城京の内部構造に関する若干の問題」, 『岩手大学学芸学部研究年報』19-1, 岩手大学学芸学部, 1961, pp. 15-34.
山中章, 「律令国家形成過程の古代王権」, 『日本古代王権の成立』, 青木書店, 2002, pp. 41-94.
王維坤, 「唐長安城と平城京の比較研究」, 『人文』2, 学習院大学人文科学研究所, 2004, pp. 8-20.

3. 단행본

岩城隆利, 『元興寺編年史料』, 吉川弘文館, 1983.
大橋一章, 『興福寺-美術史研究のあゆみ-』, 里文出版, 2013
_____, 『薬師寺』, 保育社, 1989.
大脇潔, 『飛鳥の寺』, 保育社, 1989.

堅田修,『日本古代寺院史の研究』, 法藏館, 1991.
狩野久,『古代寺院 (古代を考える)』, 吉川弘文館, 1999.
岸俊男,『日本の古代宮都』, 岩波書店, 1993.
北村優季,『平城京成立史論』, 吉川弘文館, 2013.
小林裕子,『興福寺創建期の研究』, 中央公論美術出版, 2013.
関野貞,『平城宮及大内裏考』, 東京帝国大学工科大学, 1907.
大安寺史編集委員会,『大安寺史・史料』, 大安寺, 1984.
三舟隆之,『日本古代の王権と寺院』, 名著刊行会, 2013.
森郁夫,『日本古代寺院造営の諸問題』, 雄山閣, 2009.
_____,『日本古代寺院造営の研究』, 法政大学出版局, 1998.

[Abstract]

Study on the Gekyo of the Heijokyo

Lim, Nam-Su

There is the square-shaped protrusion called *Gekyo* in the eastern area of *Sakyo* of *Heijokyo*. This study which investigates the propose of establishment of *Gekyo* builds the hypothesis as the followings after researching the traits of various temples that were relocated from *Fujiwarakyo* to *Heijokyo*.

First, as the time *Heijokyo* capital relocation, *Daikandaiji* which the emperor of Japan set up and *Yakushiji* were moved to the place corresponding the temple site of *Fujiwarakyo*.

Second, *Kofukuji* which is the temple of *Fujiwara* family is assumed that it was moved to the present temple site by *Fujiwara-no-Fuhito*, one of the prominent figures in politics who promoted the capital relocation around AD. 710.

Third, *Asukadera* which is the national temple was not easy to be symmetrical vertically, because *Kawaradera* was not moved. In addition, as the southern area of *Shichijo*(7th street) was the residential area it was not appropriate to be the temple site, therefore, I assume, the eastern area of *Sakyo* was chosen.

However, though *Asukadera* was the national temple, it was located at lower area than *Kofukuji* which is a lower class temple. *Asukadera* must be unsatisfied thus I think there could be the some who have hard feeling about the relocation of the temple.

For these reasons it was presumed *Gekyo* was founded by combining the sites of *Asukadera* and *Kofukuji*.

Key words : Heijokyo, Gekyo, Fujiwarakyo, Kofukuji, Asukadera(Gangoji)

임남수
소속: 영남대학교 미술학부
주소: 경상북도 경산시 대동 214-1 영남대학교 미술학부
전화번호: 053-810-3313
전자우편: yuart@ynu.ac.kr

이 논문은 2014년 11월 04일 투고하여
2014년 12월 15일까지 심사 완료하여
2014년 12월 15일 게재 확정함.